

日々徒然

何気ない出来事に心を寄せて

ウエルビーイングのバトン

本別町立本別中央小学校

教諭 幾島 佑真



教師として働き始めた1年目は、学級経営や授業の進め方、分掌の仕事など、分からないことが山のようにあり、先輩方の姿を見て日々学びを積み重ねてきた。あれから7年が経過した。分かることが増えていく一方で、また新たに分からないことが生まれている。この新たに生まれた分からないことについては、先輩だけでなく、同期や後輩の先生方の実践からも多く学ばせていただいている。今日まで、私が教師として働き続けることができたのは、よき職場や仲間にも恵まれてきたからにほかならない。

近年「ウエルビーイング」という言葉をよく耳にするが、仕事を行う上でとても重要なキーワードであると感じる。教師は非常に大変な仕事であるが、その分、やりがいが多い仕事である。

しかし、そのやりがいを感じるためには、教師自身が満たされた環境にすることが大切である。相談に乗ってくれたり、ちょっとした愚痴を聞いてくれたり、作業を手伝ってくれたり、そんな信頼できる仲間がいるからこそ、大変さの中にも満たされる気持ちを感じることができているのではないだろうか。今まで私は、その環境を誰かに作ってもらうことで、ウエルビーイングをかなえてきた。

これからは、私自身がその環境を作る側になっていきたいと思う。自分でできることからまず一歩踏み出し、共に支え合い、より多くの先生が安心して働けるよう、みんなでウエルビーイングをかなえていきたい。

きつかけなんてそんなもん

上士幌町立上士幌中学校

教諭 松久 麻美



家に帰ればピアノの音が聴こえる。母がピアノ教室をしていたからだ。私自身も幼少の頃から近所のピアノ教室に通っていて、音楽が身近にあることが当たり前だった。

中学生になった頃、ぼんやりと「音楽大学に行きたい」、そんな思いが芽生えた。それならば…と、母が「高校から専門的に音楽の勉強ができる学校があるよ。そこに行ってみたら?」と勧めてくれた。

「でもピアノはそんなに自信があるわけじゃないなあ。別の楽器をやってみようかな」と、10年ほどの経験があるピアノよりも、他の楽器を2、3年習って受験をしてみようと思った私。(今思えば無謀な気がする…)

「サククスにしようかな」と、小学校のクラブ活動で経験したことがあったため思ったが、講師の方を探すことができずに断念。そこで出会ったのがフルートだった。どうしてもやりたかった楽器なわけではない。講師の方がいるから、そんな安易な考えで選んだものだった。それから2年ほどレッスンを受けて受験し、音高、音大、そして教員へ。

あれから30年ほどたった今でもフルートは続けているし、私の大好きな楽器だ。もし、あのとき母が勧めてくれなかったら、そのままピアノを専攻していたら、違う楽器を選んでいたら、きつとフルートには出会っていなかったら。

ほんのささいなことがきつかけになる。
きつかけなんてそんなもん。